

また、同一患者で併病を有している場合には、主病名のみを採用した。

統計学的には、 χ^2 -検定にて検討した。

3. 結果

① 幼年期、少年期、青年期に発症する障害、不安障害、適応障害、Vコードは増加した。

② 精神分裂病、気分障害、精神活性物質常用障害は、減少した。

③ 増加している疾患、及び変化がみられない疾患には、地域差がみられなかった。

④ 減少した疾患には、地域差が認められた。精神分裂病は南魚沼郡で、気分障害及び精神活性物質常用障害は、北魚沼郡で減少した。

⑤ 特に南魚沼郡の精神分裂病の激減は、五日町病院開設の影響と推定され、魚沼地方の地域医療に於ける小出病院精神科の役割が変わりつつあることが示唆された。

20) 耳鼻科領域における精神科コンサルテーション

小林 慎一	(大島病院)
稲月 原	(飯塚病院)
小熊 隆夫	(白根緑が丘病院)
金子 晃一・滝沢 謙二	(新潟大学精神科)
内藤 明彦	

新潟大学精神科では昭和59年3月より「コンサルテーション・リエゾン外来」を開設した。その中で耳鼻科からの診療依頼が比較的多いとの印象を持っていた。そこで今回我々は耳鼻科からの依頼状況を調査し、その実態を把握し、かつ代表的症例を提示し、耳鼻科領域におけるコンサルテーションの特徴を明らかにしてみたい。

昭和59年3月から平成2年11月までにリエゾン外来を受診した患者の診療科別の内訳を見ると、内科からの依頼が圧倒的に多く、一般内科と神経内科を合計すると、全体の57.7%を占めている。耳鼻科は17診療科のうち6番目であり、28名、全体の4.2%を占め、内科を除いた診療科の中では比較的依頼件数は多いと言える。この28名のうち、男性が15名、女性が13名であり、年齢分布は、2歳から69歳まで幅広く依頼があった。

耳鼻科における主訴では、難聴が8名、28.6%と最も多く、次に疼痛が4名、14.3%であり、以下発声障害と知覚異常が共に3名、10.7%、耳鳴りが2名、7.1%であった。

神経科における診断では、うつ病ないしうつ状態と診断されるものが7名、25%と一番多く、次に心因反応が5名、17.9%であり、以下精神分裂病、ヒステリーがともに3名10.7%となっている。また、精神科の評価では正常と見なせるものが3名、10.7%存在した。

次に代表的症例を提示してみたい。

症例1は27歳の女性で、難聴のため耳鼻科を受診したが、耳鼻科的検査では異常なく心因性難聴の疑いでリエゾン外来を受診した患者である。診断は転換ヒステリーと考えられた。症例2は58歳の女性で手術部位の疼痛が持続して心因性疼痛の疑いで紹介された。診断は心因反応と考えられた。症例3は40歳の男性で耳鳴りを主訴として耳鼻科を受診したが、精神疾患が考えられリエゾン外来を受診した症例である。診断はうつ状態であった。

耳鼻科は臨床各科の中で特に心理的側面の配慮が重要であると言われている。その理由の一つとして、耳鼻科は聴覚や音声、言語の問題に対処を迫られることが多く、コミュニケーションの障害を扱う点で精神医学と似た側面を有していることがあげられる。またもう一つの理由として耳鼻科は症例3のうつ状態に伴う耳鳴りのように、精神疾患の身体症状が発現し易い部位を扱う点があげられる。うつ病の身体症状として耳鳴りやめまい、咽喉頭異常感が比較的多いとする報告がある。近年のうつ病の軽症化、身体化に伴い、さらに耳鼻科においてこのような症例が増加すると思われる。そのため今後ますます耳鼻科領域におけるコンサルテーション活動が重要になって来るであろうと考えられる。

特別講演

「痴呆と失語の関係をめぐる諸問題」

金沢医科大学神経精神科教授

鳥居方策先生